

RUNUP!! FUKUSHIMA

第2号

Tokyo2020 オリンピック
聖火リレーふくしま情報紙

発行日 / 令和2年11月11日

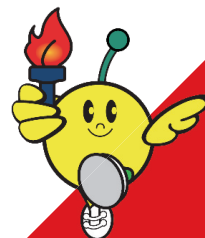
発行元 / 福島県オリンピック・パラリンピック推進室

olipara_suishin@pref.fukushima.lg.jp 024-521-7312

\\ ともともを知りたい \\

オリンピック聖火リレー

5つのギモン



2021年3月25日(木)に本県のJヴィレッジでグランドスタートを実施し、その後3月27日(土)までの3日間県内で実施されるオリンピック聖火リレー。そもそも「なぜ聖火リレーを行うのか」などまだまだ知られていないこともたくさんあります。今回は知っておくと聖火リレーをより楽しめる基礎知識をご紹介します。

ギモン01 | なぜ聖火リレーを行うの？

聖火リレーは、オリンピック発祥の地であるギリシャで採火された炎を、ギリシャ国内と開催国内でリレーによって開会式までつなげるものです。オリンピックのシンボルである聖火を掲げることで、平和・団結・友愛というオリンピックの理想を体現し、開催国全体にオリンピックを広め、きたるオリンピックへの関心と期待を呼び起こす役目を持ちます。県内の聖火リレーでは、これまでのご支援に対する感謝と復興に向けて歩みを進める福島の現状を国内外に発信します。



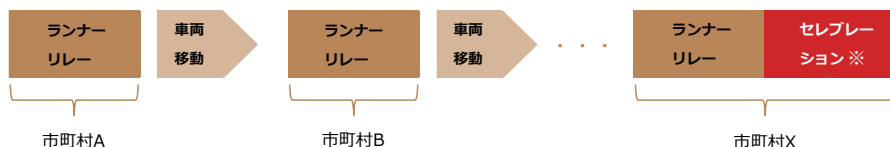
ギモン02 | 聖火はどこからやってくる？



聖火は開会式の数ヶ月前に古代オリンピック発祥の地ギリシャ・オリンピア市にあるヘラ神殿跡で採火されます。太陽光を集め、採火した聖火は第1聖火ランナーに引き渡され、ギリシャ国内での聖火リレーが開始されます。今年3月12日に行われた採火式後のリレーでは、リオ2016大会射撃金メダリストのアナ・コラカキ選手からアテネ2004大会マラソン金メダリストの野口みずきさんへ聖火が渡されました。日本に運ばれた聖火は宮城・岩手・福島の被災3県で復興の火としての展示を経て、来年3月の再スタートを待つ現在も変わらず灯り続けています。

ギモン03 | 東京2020大会の聖火リレーはどう行うの？

聖火ランナーは原則一人で走行します。聖火ランナー一人あたりの走行距離は約200mです。1つの市町村内でリレーを行った後、次の市町村へは車両で移動します。



▲聖火リレーの1日の流れ

※聖火の到着を祝うセレモニー

移動の際には、聖火を専用のランタンに格納します。次の市町村でランタンからトーチに再び点火し、リレーを繰り返します。

ギモン04 | 聖火ランナーってどんな人？

東京2020オリンピック聖火リレーの聖火ランナーは、各都道府県実行委員会とプレゼンティングパートナー4社（日本コカ・コーラ株式会社、トヨタ自動車株式会社、日本生命保険相互会社、日本電信電話株式会社（NTT））等からの公募または推薦により選定されます。福島県では、県内59市町村それぞれにゆかりのある方1名ずつと、福島県の現状や魅力を発信するPRランナー6名と1グループが選出されました。

延期後の新たな聖火リレーのランナーについては、既に決定していた聖火ランナーの皆さんに優先して走行していただく予定です。



▲聖火ランナーのユニフォーム

ギモン05 | 1964年東京大会の聖火リレーってどうだったの？



1964年東京大会の聖火は、ギリシャから特別機で沖縄に運ばれました。沖縄本島を駆け抜けた聖火は、鹿児島、宮崎、北海道に運ばれ、4つのコースに分かれて全都道府県を巡りました。福島県内では、1964年9月28日から30日にかけて、国道4号に沿って走行しました。

28日は、国見町から桑折町、伊達市を経由し、福島市の県庁前まで運ばれました。29日には、二本松市、大玉村、本宮市、郡山市を駆け抜け、郡山市役所（現福島県郡山合同庁舎）へ到着。30日には、須賀川市、鏡石町、矢吹町、泉崎村、白河市を通り、西郷村から栃木県に引き継がれました。

\\ 当時の思い出を伺いました //

1964年の聖火ランナーにインタビュー

前回大会の聖火ランナーとして、本宮市の区間を走行した渡辺幹夫さん（当時20歳）に聖火リレーの思い出や今回の東京大会について伺いました。

—聖火ランナーとして走行した時の思い出を教えてください。

沿道には切れ目なく大勢の人が並んでいました。街中に差し掛かった際には、「みんな見てください！」と思いながらトーチを大きく掲げたことを覚えています。私は5歳の時に父を亡くし、母が女手一つで育ててくれました。「おふくろを幸せにしてあげたい」という気持ちを強く持っていたため、聖火リレーは最高の親孝行にもなりました。

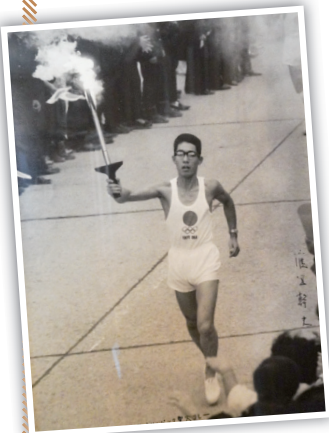
また、当時日本は戦後19年でまだまだ地方は荒廃した状況でした。そんな中でのオリンピックや聖火リレーは、復興へのかけがえない希望の光のように映りましたし、聖火リレーをきっかけにオリンピックへの県内の盛り上がりが生まれたように思います。

—東京2020オリンピックの聖火ランナーへのアドバイスをお願いします。

今回の聖火リレーは、震災や水害などから復興へ向かう福島姿を見てもらうきっかけになると思います。頑張っている人、応援している人など様々な人の思いを背負って走ってもらえればと思います。そして聖火ランナーという貴重な経験を多くの人たちに分け与えてほしいです。

—東京2020大会にどんなことを期待しますか。

私は現在、ボランティアガイドとして安達太良山で自然の素晴らしさを子どもたちに伝える活動を行っています。そうした経験を生かそうと、東京2020大会では福島県の都市ボランティアに夫婦で申し込みました。国内外から来る人々をお出迎えして、良い思い出を持ち帰ってほしいです。オリンピックのファンの皆さんとの記念品交換など、訪れてくれたいろんな人々との出会いを楽しみたいです。



1964年大会聖火ランナー
渡辺 幹夫さん（本宮市）



▲聖火を受け取る渡辺さん（左）
◀走行後、母・フミさんとの記念写真

